

冒険する科学者

Scientists in Adventure

宮下 哲人（カナダ自然史博物館）



第30回 感性の博物館

僕にとって世界でいちばん居心地のいい場所は、パリの地下にある。セーヌ川の南岸、第5区には17世紀に設立された由緒ある植物園があり、その正門をくぐってすぐ左手にあるのが、フランスの自然史研究の殿堂ともいべき比較解剖学博物館だ。しかしその建物自体には大した意味はない。歴史あるといえば聞こえはいいかもしれないけれど、実際のところは老朽化した体育館をいくつかくっつけたような、当時としてもいい加減な普請のようだ。建設された時期はエッフェル塔と大して変わらないのに、こっちの博物館の方がだいぶ古く感じる。建て付けは悪いし、屋根は雨が漏らしい。この博物館が植物園にできた1890年代といえば、フランスの第三共和制がごたごたしていた時期だから、まあ無理もない。その博物館の裏手に回ると、職員専用の玄関があり、味も素気もない古い町役場のようなロビーを通り抜け、階段を降りてすぐの踊り場に無骨な茶色のスティールドアがついている。そこが地下室への入り口だ。

きしむ木のステップを踏んで降りていくと、地下の廊下は人がやっとすれ違えるぐらいの幅しかない。頭上の電球はところどころ切れていて、ただでさえ薄暗い空間がゾンビ映画並みに重苦しい。僕のお目当ての部屋はこの廊下の突き当たり、向かって右側にある。廊下と違って、この部屋はずいぶん広い。アフリカゾウを二頭ぐらい押し込めて、その隙間に水牛をもう二頭ぐらい詰めすることもできそうだ。ただ、ゾウの代わりに標本棚が連なっているから、実際に動けるスペースはやっぱり狭い。タイ・カップが初めて首位打者を獲ったその昔（1907年だ）にはまばゆいばかりだったろう白壁も、長い年月にわたって化石の塵と研究者の呼気や垢をすいこんでねっとりした色合いになっている。地下とはいっても、建物の周りの地面が掘り下げられているから、頭上には一応窓がついている。「パラサイト：半地下の家族」の自宅みたいに。そこからは表のビュフオン通りが見える、というより、そこに行く足が見える。きちんとした革靴や、好戦的なハイヒールや、せわしないランニング・シューズや、サンダルから登山靴まで。雨の日には足取りが速くなる。そういう日には、その部屋の空気も湿って重く、かび臭くなる。

天井はそのまま、地上の比較解剖学博物館の木の床だ。博物館の来館者が頭上を通るとそれがきしんで音をたてる。日曜日なんかにこの部屋で作業をしていると、



パリ自然史博物館の地下収蔵庫での作業風景

おしゃべりなオカメインコの大群の中にいるような気がする。いつの日か床が抜けるんじゃないかと思うんだけど、過去100年余り、幸にしてそういうことは起こっていない。起こっては困る。何しろこの部屋には、世界中から集められた、ありとあらゆる魚の化石が収められているのだ。スピッツベルゲンのフィヨルドや、ポリヴィアの高原や、マダガスカル谷や、オーヴェルニュのワイナリー。そこはこのパリに住むほとんどの人にとってただの古い地下室だけど、僕にとっては世界中を旅する玄関口である。

☆☆☆☆

わざわざそんなことを思い出したのは、つい先日にあるツイートが取り上げられているのを見たからだ。



というものだ。白杖を持っているからといって全盲とは限らないし、弱視であっても色合いやコントラストや輪郭を識別できるし、オーディオガイドや学芸員ツアーだってあるし・・・という反論は、もう他の人もしているので、ここではしない。

僕がこの件に関して思うのは、あまりにも視覚に引きずられていやしないか、ということだ。ほとんどの人が美術館や博物館が目で見えるものだと思っているみたいだけど、本来ものを陳列する設備というのは、色んなやり方で知覚できるはずなのである。僕が博物館の展示室の中で目を閉じたとしても、そこには音によって作り出される空間があり、反響によってそこに何かがあることを感じることができる。人によってその音の輪郭ははっきりするだろうし、そこに視覚だけでは見落としてしまう情報が含まれているだろう。そして、音や光だけではなく、エアロゾルによって作られる空間がある。つまり、匂いをかぐことができるし、敏感な人ならその化学物質のわずかな濃度勾配を味として感じたり、皮膚上のレセプターによって感知したりしているはずである。そしてもちろん、触覚がある。展示物に触れる必要はない。空気の流れや温度の勾配を感じることで、直接触れずに展示物を鑑賞するのも可能なはずだ。そしてこれがいちばん大事なことなのだが、僕やあなたがそれを想像できるということは、おそらくすでにそうしているということである。そうやっ

て展示を体験しているにも関わらず、それは意識には入ってこない。なぜかという、ほとんどの人は視覚に頼り過ぎていて、眼から得ている情報が他のすべてを 圧倒しているからだ。

そういう視点から考えると、現代の博物館や美術館はずいぶんと不親切につくられていると言わざるを得ない。基本的には、「現代的な」博物館の展示というのは、視覚情報の洪水を作り出すことに注力している。しかしそうすることによって、弱視や全盲の人だけでなく、無意識的に五感で展示を体験している人からも、その体験を奪っているのである。僕が管理している カナダ自然博物館の化石展示室だって、その例外ではない。たとえばこれは世界的なトレンドだが、経年劣化から化石標本を守るために（そして様々な恐竜の骨格に色んなポーズを取らせる ことのできる利便性ゆえに）、実物からレプリカに少しずつ置き換えている。本来ならば



パリ自然史博物館の地下収蔵庫での作業風景

匂いで 岩石のタイプを嗅ぎ分けたり、音の反響から重みを感じたりできたものが、石膏やプラスチックでできた複製に取って代わられているわけだ。視覚的には見た目が変わらなくても、それ以外の感覚を通した体験の質は確実に変わっているはずである。それ以外にも、標本を守るためにガラスケースの中に陳列することで、それは視覚でしか楽しめないものになってしまうし、空間を立体的に使うために入れた仕切りや標本の壁が音の反響を台無しにしてしまっている。以前は壁に直接描いていた背景画も、今ではデジタル・アーティストが作り、壁紙にプリントして貼っている。それならいつでも張り替えられるし、細部まで作り込めるし、何しろ速くて安上がりだからだ。しかしソフトウェアを使って描かれ、プリンターで出力された壁画からは、絵の具の匂いを嗅ぐことも、絵筆のタッチも感じることはできない。ジオラマに実際の植物や本物の土壌を処理して入れることも少なくなっている。全部プラスチックで出来てしまうからだ。おかげで展示物が腐ったり劣化したりすることはなくなったが、そこにはリアリティーの一部が欠けている。

視覚にこだわるあまり、他の感覚を忘れてしまった博物館の展示室は、どこか薄っぺらい。それはパンデミックの最中に流行った「ヴァーチャル博物館」のどれもが期待したほどの反響を得られなかったことからわかる。そしてマックを駆使し、コーヒーを片手に「インタラクティブな博物館体験」を追求するデザイナーたちは、なぜ来館者がすぐに退屈し、飽きてしまうのかをほんとうの意味で理解しているとは言えないだろう。博物館体験を豊かなものにしよう、と彼らは言う。しかしそれは実際のところ、聞いたり、嗅いだり、触れたりする体験を奪っているのではないか。

☆☆☆☆

というわけで、もしツイート主の古風なくじらさんの娘さんを案内するとしたら、僕が勤めるカナダ自然博物館ではなく、パリの比較解剖学博物館を選びたい。僕も仕事柄あちこちの博物館を見てきたが、パリを超えるものはどこにもない。まずあのきしむ木の床がいい。冷たく硬い大理石

の床と違って、それは訪問者を優しく受け入れてくれる。博物館の展示は設立当時からあまり変わっていない。ありとあらゆる骨格標本がカーニヴァルのパレードみたいに次から次へ並べてある。説明板の類はほとんどないから、ほとんどの人は、どれがどの動物か半分もわからないだろう。しかしその中には、ナポレオンの遠征隊がエジプトから持ち帰った埋葬品や、キュヴィエやラマルクといった博物学の大家たちが自ら組み立てたものなど、知っている人間なら思わず拝みたくくなるようなものが無造作に置いてあるのだ。仕切りも最小限しかないし、すべてがひとつの大きなホールの中に展示されているから、人がたてる音はすべて反響し、四方八方から降り注ぐ。しかしクジラの骨格の側に立てば、バッファローの骨格の側とは反響が少し違うことがわかるだろう。その感覚は、コウモリやイルカのおこなうエコロケーションと同じ成り立ちのものである。建物の窓からは自然光が差し込み、時々ま恩寵のようにいくつかの標本をライトアップする。安普請の壁にはめこまれた昔のガラスだから、紫外線カットなどという気の利いた仕込みはない。手をかざせば温かみを感じるはずだ。漂白された標本がきつく匂うということはないが、鼻のきく人なら日光が当たった骨から出るかすかな揮発物をかぎとることができるかもしれない。そしてそれは、脂肪のたっぷりしみこんだアザラシの骨と、がりがりに痩せこけたチータの骨とでは、化学的な成り立ちが違っている。



比較解剖学博物館（パリ自然史博物館の付属施設）

もちろん、博物館には学習のために行くんだという気合のはいった人もいるだろうし、説明の少なさを物足りなく思う人もいるだろう。しかしいったんその空間に足を踏み入れたら、展示スタイルが気に入ろうと入るまいと、たったひとつのことだけはクリアでフィジカルな体験として実感できるはずだ。それは比較解剖学という学問がどういう成り立ちのものであり、どんな人間がこのような博物館を作ってしまうのか、そして彼らはどのような種類の情熱のもとに世界の果てまで標本を集めに行ったのか、という人間存在の根幹についての立体的な理解である。たとえ社会が

どうだろうと（フランスが戦争に負けようと、革命で政府が倒れようと、流行り病で死んだ人たちが道端に転がってようと）ある種の人たちはそのようにして生きてきたのである。それが道義的にどういう種類のものであれ、そういう人たちが存在するということが自体は否定しようがない。滅菌された純粋培養的な現代の科学博物館に行っても、そんな感慨を覚えることは（よほど想像力の強い人でない限り）ないだろう。

☆☆☆☆

僕の博士論文の指導教官のひとり、学生時代にパナマでフィールド調査をしていた。その時の相棒に「赤の女王仮説」を捕食者と非捕食者の関係性を元に理論的に深化させたゲイリー・ヴァーメイがいる。具体例をあげると、恐竜時代からカニは巻貝を捕食し続けてきたが、時を追うごとにカニのはさみは進化し、巻貝の殻もそれに比例して堅牢になっていった。そのような進化における「軍拡競争」とでもいうべき現象を研究している人である。科学者としてのヴァーメイを決定的に特徴づけるのは、彼が全盲だということだ。彼は触覚・聴覚・嗅覚に頼って研究をする。貝殻を触って、その形状を立体的に記憶し、分析するのだ。それは彼以外の誰にもできないことである。

僕の指導教官とヴァーメイはよく夜中の潮間帯に入って行って、海の生き物を採集したそうだが（もちろん全盲のヴァーメイにとって、それが夜中であろうと真昼であろうとまったく関係のないことである）、同じところで同じ時間に採集しても、ヴァーメイが捕まえるのは指導教官とはまったく違った生き物たちだった。それは視覚（ヘッドランプの明かりのもとで探す指導教官）と触覚（手探りで捕まえていくヴァーメイ）では、知覚している世界が違うということである。そこから長い年月が経っても、指導教官はヴァーメイとの体験から滋養のある教訓を得ていたのだと思う。僕が難しい論文を書いていて考えに行き詰まった時、彼はその話をするわけだが、それはアドバイスというよりは、注意喚起だったのだと今になって思う。視覚的経験則に頼っている、「見えて」こないものもあるのだと。



比較解剖学博物館（パリ自然史博物館の附属施設）

☆☆☆☆

僕が長い時間を過ごしたパリの魚類化石の収蔵庫は、最近になって老朽化が懸念され、通り一つ隔てた新しい建物に移転した。元の地下室はおそらく今は物置き場としてしか使われていないはずだ。僕はまだその新しい収蔵庫に足を踏み入れていない。でも雨の降るような日にメールの返信や書類仕事に飽きると、僕は研究室の窓の外で音もなく滴に打たれている世界を眺め、ビューフォン通りを足早に過ぎ去っていく人の足元や、デヴォン紀の頁岩と湿った春の匂いが入り混じったパリの4月を思い出す。考えてみれば、僕がその当時両肺にいっぱい吸い込んでいたのは、埃やカビだけではなく、掛け値なしに幸福な時間だったのだ。

(編集部より)

学習交流会を機会として、今回久しぶりに連載原稿を依頼しました。今後も断続的に執筆をお願いする予定です。

なお、筆者には2月18日に第2子(女兒)が誕生しました。おめでとうございます。